

平家為清 長門守 八

リ 5  
2004  
8





卷  
2004  
卷



平家物語卷八

高倉宮御車

長兵衛尉信連車

猿眼赤鬘劣車

宮入御三井寺車

山門南都牒帖車

源三位入道馳參三井寺車

競瀧口三井寺參夏

山門心夏車

不邨桐林  
藏書之章

廣辻氏  
藏書記



白三井寺擬押寄六波羅車  
 孟掌君車  
 小枝蟬折御笛車  
 宇治橋軍古夏  
 足利又太郎宇治川渡車  
 源三位入道父子自害車  
 宮被討御車

高倉宮御車 附長兵衛信連車

高倉宮御所に於けんいひしすま向はありけり信連は  
 うすきさうせれぬ乃志すくしたる急ふの太刀は  
 くの袋より御押をいして急行けんのくち押し入  
 りてあせられたぬ小枝の目を出して中川のゆふた  
 たすふたり宮ハ今十余丁も延はせぬとわたりぬと  
 につけんいし三人を勢三言上はも押家けり源太夫  
 利官と名をありとみへともふふ別介は担たり博士  
 利友出羽の別友系かうう門の内へち入てちり多に



君世をみよさなり(たう)一(たう)のたを子細を教ふる  
たのたよ當宣を兼え宿人先長為成齋りて  
ひとたうふま中けれ信連出合ふ當時を是は所そ  
はつた思ひたる出あそしひと齋りて齋同侍り(たう)たれ  
情士の別宿出た(たう)より此は所あうていつふた(たう)  
セリ(たう)と齋よりたれは所を押中れてりし先  
まいつせよと知しけれ信連たれえ取田念(たう)の  
い(たう)しものこし(たう)ふ我君(たう)ま(たう)たれ(たう)思(たう)ふ(たう)業  
か(たう)う(たう)の内(たう)入(たう)た(たう)り(たう)奇(たう)怪(たう)あ(たう)る(たう)志(たう)り(たう)と(たう)り(たう)米(たう)の(たう)ま

い(たう)せ(たう)よ(たう)と(たう)い(たう)ふ(たう)上(たう)當(たう)時(たう)先(たう)は(たう)所(たう)そ(たう)と(たう)た(たう)れ(たう)た(たう)し(たう)も(たう)ハ  
い(たう)せ(たう)よ(たう)う(たう)う(たう)の(たう)ゆ(たう)い(たう)る(たう)ま(たう)ふ(たう)者(たう)う(たう)か(たう)と(たう)う(たう)ひ(たう)り(たう)け  
置(たう)たり(たう)り(たう)ん(たう)宮(たう)の(たう)侍(たう)の(たう)中(たう)は(たう)右(たう)兵(たう)衛(たう)尉(たう)長(たう)谷(たう)部(たう)の(たう)信(たう)連(たう)と  
し(たう)者(たう)也(たう)い(たう)や(たう)し(たう)志(たう)り(たう)と(たう)て(たう)加(たう)り(たう)衣(たう)は(たう)お(たう)ひ(たう)引(たう)切(たう)え(たう)か(たう)け  
と(たう)も(たう)あ(たう)の(たう)せ(たう)は(たう)高(たう)く(たう)を(たう)い(たう)じ(たう)單(たう)摺(たう)乃(たう)十(たう)を(たう)し(たう)み(たう)く(たう)た(たう)意(たう)ふ  
は(たう)太(たう)力(たう)を(たう)以(たう)た(たう)て(たう)と(たう)ん(たう)て(たう)か(たう)る(たう)ま(たう)に(たう)車(たう)り(たう)何(たう)た(たう)り(たう)し(たう)く(たう)使  
願(たう)ん(たう)志(たう)す(たう)こ(たう)是(たう)を(たう)か(たう)め(たう)ん(たう)と(たう)共(たう)す(たう)る(たう)者(たう)を(たう)い(たう)ん(たう)ふ(たう)切(たう)を(たう)い  
七八人(たう)也(たう)切(たう)あ(たう)せ(たう)たり(たう)母(たう)の(たう)て(たう)先(たう)長(たう)り(たう)あ(たう)り(たう)あ(たう)て(たう)う(たう)ら(たう)先(たう)長(たう)が  
下(たう)部(たう)に(たう)令(たう)武(たう)と(たう)中(たう)け(たう)る(たう)者(たう)の(たう)も(たう)う(たう)り(たう)の(たう)有(たう)け(たう)り(たう)大



もろ巻ふ左右はあまはいろす刀をぬた合て中ふ  
處にえたりれと指れをち打控ふ所へ乱入るんと  
志りける友無事衆人ふちしりて入てきんし小  
切也りけれと本の葉の尻ふ吹れとを指した下り  
あふける信つうは石乃葉内と知たり今この地りしと  
けれとの葉ふ切つめて下と切あふと追はめてきんと  
切信連りしより古無にはあふの太刀をれより身をち  
か白の葉作りせにれもつりしりしれてしきみはれと  
いふふ書て押出ししと又三十系人切伏たりし

おいら教を志すす打とる教三十系人と指ゆへし信連  
系り教むはれと柱ふ二活と何をもあふり部等近  
後四郎次成と云者長刀をもち移しいよりて長刀のえ  
をうけすつんと切まけれと長刀の柄をすそふとるを追所  
あふりしをたてけりあふりしをうけりしにけり

猿眼赤鬚男の事

光長志りし七郎次清としてたけ七郎半ら男の太刀の  
者十余人の力りちたりと剛く猿眼の赤むけちるり(虎)と  
おいら七巻ふあいに志えの長加をもちたりけり一人



當千ん思ひをりて主の馬の川をみふ存りけるう  
うりをとをたす大いふに成て長刀をひらめて信連う  
市へ飛らるるけれと信連は志のたりとて十文字にむい  
かす信すをのつとなく信つる太刀をのけて下とる  
そは二の太刀をうとせす世つとらんて此男を左の脇ふ  
ういはあみと存るうと太刀をうらり

て出羽の別友ふれをうらんうとあつやう君の魂ふにの  
みたりける剛ゆる様まふこと赤いけおとあをうたははの  
えんうつれ助たかくきまけよといひけれも克長教

入る音のせりのれとをうとあて命をたつてくれより  
已程のすいもつみはるふとて強く控たりくれと  
志入るをうつあふ伏より信連にさきあまうと追  
えられえふけちつたりけるり記まきうけをのりて  
みりあけちまふあふの赤いけのぢううとよとせりけり  
といひけれと誠まふあけあるあをのらあけてやけるは  
まふら大いあふに何ひ思れとうれをぬきうくとやける  
あかうとつらるる信連は股のたすいたふなりけれは  
叶うとあ思ひけん小門をうり出る東をのりて



高倉をせりし名をいしるも長兵衛尉信連大車れ  
いおひたりやしりんとすん者とのよ中しめし  
て志つくとけけるを意ひし部はけえといの者  
強じよりて長刀をくらひしと取つとあは  
ひるを信連長刀えよせりんとくけり程し  
い志よりけん乗をのしといけりれにたりす  
れをち信連をかき免てお<sup>原</sup>葉といてまいる前大將定盛  
今大いといの信連を冠上は引すといのまひける  
ま川えいせんしは使よむひて種は思ひをいん

と及なる多たれつをひり系物まりさ(おこもくのち  
をせつといひん傷の条はうまんとするおれりんをく  
りて宮れは在り并書れ子細をく(く)といて  
白帖記録は後と河原に引出し(を)をを  
しものゆいりれは信連のまはりうに(を)といひて  
中けるは日本國をうたふけくおそ(す)た君の  
山内小左程のりせん(は)使を思ひし使廳  
れ下アを又傷書りおれ(は)何百騎の軍  
三ありも一人し(は)討者をもとせりたつれも







と剛一若狭のしと中野と又阿の侍中けるは  
其比のしと見えの大番亂共のしと見えのしと  
ほりける大和此強盜二人を信連た二人して名合  
て四人をとたわらふしと見え二人をせ捕はたり見え  
中野のしと見え兵衛尉と毎度この秘を阿のしと見え  
若狭のしと見え阿のしと見えの若狭のしと見え  
みれ見解の若狭のしと見えのしと見えのしと見え  
たのしと見え一人當千の若狭のしと見えのしと見え  
見えのしと見えのしと見えのしと見えのしと見え  
見えのしと見えのしと見えのしと見えのしと見え

阿のしと見え切替として換られにけり後二剛一と  
信つゝと本所亂長右馬亮忠連の子也伯耆國の  
化らくして令持邊に居のりけるを家滅亡乃後  
兵衛佐頼朝の化を剛一と信連とけり若狭のしと見え  
んがしと見えのしと見え大廿川あるしと見えとして加比國七守  
獲に作去文治二年に關東へ去りしれを去るを  
後けしにけり若狭のしと見え兵衛佐自平乃らるの下文  
に之能登國大屋庄号を信連に給けるは  
のよりしと見えその後云々阿のしと見えのしと見え大谷にて



世のりける

宮入御三井寺事

高倉宮先内せありぬし 其後広多人のりける

く入山大魚十々三系京極也迄たるう剛けれは  
家七人右大将以下七軍兵池向いたり花若法師  
一人のりけるおりぬしとふたれい事ぬれは  
志川よりにけり天狗くゆれにまうと我受一十口  
に高倉宮三井寺に近巻らせりこれハハリ此  
宮とゆり法皇七由子にまうとせとよ我乃事に

有し其つゝかろ侍をける出来はれきたる殿に  
志川よりまうぬしとふる都ハ出る也とせ思く克  
けるお國とちや一重盛去之八月より勢のい  
と二男右大将宗盛に目くかふかく世間此事ハつ  
りく及ぬる原のりけるいしとゆり大將ノカ  
うくして宮をわくまうせたる事ハかーと中  
のいける宮と高倉をたほりにを清河系まうし出也  
ぬいそやも其後れうちふ如意山ハ世入せ給はるまう出路  
をよりすのり入せまうけるも其草の茂ミツ下の病けい



を市也等不せそくも思召れけ免所此を山尾みかをん  
とつこのれよをもせむ法もふくぞりさるせ給けるいと  
ささりたれ深山のうちをぬめてまたより後うせぬい  
けれと白くいつくし死由のう津此れ免にゆゑある  
黒く翠ある由くしゆふのいたまふもれ果ていうと  
成果んすり事やうんと思く古法くるおあし  
時鳥の一声幽に漸けけれと心中に加る我言法け  
らり

時を志ぬ山跡すまふくしゆも我身をもろけける

昔天武天皇大友比王子にお召をれてより山に入給  
ひけんものく出給おほり免所此れゆゑおもわれと何のま  
かりあり三井寺にたよりはせぬいいたる命のおし  
あり大衆を教えまたり佛もそかく修すれけれ免  
大衆おありてやうきん院とこの衆に御可まつくし合  
いせありくしゆり中りきる衆徒會議くけらる  
當時の世上にたれを果すりし仏法せすらい王法の御  
新此時に有りといつてしつたに宮入御の事是ひと  
し正小幡乃清護新正神明此れにすけ也志也



瑞きり今も有此時に當る平相國を不る事をいひ  
免すこと此時を初すに我天神地祇カレヤカを  
以て仙カ階伏を言ふもいふ事人のいひ有  
これ抑々嶺ハ象宗一味乃當地南都ハ交藤物  
度の戒檀也牒送の所になんせ与カ勢出らん  
や因んて尤志のりこれう鬼後百して山川  
南都ハ牒状をばのすこと其中けり

山川南都牒状之事

山川合カす危れの由牒帖其帖云

園城寺牒 延曆寺衛

欲殊致合力被助當寺佛法破滅帖

右入道淨海慈失皇法又滅佛法愁歎無極之間去十  
廿日忽一院弟二皇子不慮之外所令入寺給也爰  
号院宜重在可奉也之責白王子令固辭之氣可被放  
遺官軍之旨在其耳堂寺破滅將當此時延曆園城  
寺者至相分門跡二所學子且之同丹頌一味教文也  
譬如鳥之二翅亦似車二輪於一方欠者車無其  
歎哉時致合力被助佛法破滅者早忘年来之



遺恨覆住山之昔鬼徒之合儀如斯仍牒送  
如件

治承四年五月廿一日

小寺主法師成賢

都誰那大法師定算

寺主大法師忍慶

上座法橋上人信成

と此去にりける山川鬼徒此牒帖をみる山川此未寺々  
當寺と山門と鳥此翼七とく車此二輪に似たりを  
之是を考也条其謂か〜と同一合議〜返牒か〜

中々南都より遣牒帖

園城寺牒

真福寺齋

請蒙殊合カ被助當寺佛法破滅牒

古佛法殊勝重者為守皇法、未長久事者則依仏  
法之從頃年以降入道前大政大臣平清盛慈國  
威亂邪制府内府外成恨成歎之間今月十五日夜  
一院才二皇子思為免不慮、難俄令入當寺給然号  
院宣の事出當寺、由路有責不能申、鬼徒一向奉  
惜之仍彼禪門欲入武士於當寺云皇法云仏法一時



正欲破滅諸鬼蓋愁歎矣昔唐憲性太子以軍法兵令  
滅佛法時清涼山之鬼徒令戰防之皇憲於斯何况  
於謀殺八逆之輩哉誰人之悖精哉就中南部者無例  
與罪被配流長者定法由內動非今度者何日遂會  
就之願鬼徒內助佛法之破滅外退惡逆之伴類同  
心而至可足本懷鬼徒愈譏如斯仍懜文如件  
此也文たりける是に法いそ興福寺返懜云

被戴來懜一紙為清盛入道文淨海欲滅遺寺佛  
法由事

懜今月廿日懜帖今日到來披覽之氣悲喜相受文如何  
之玉泉玉華院三兩家宗義金章今夕同出代教  
文南京北京共如來才子也貴寺他寺互有伏調建之  
障就中貴寺ハ我亦本師弘勳慈号常住之精舍  
也或公家或姑射山或諸色或上門講砌之時令戰智  
諱儀事是則天台法相三編花嚴等君一宗相廢  
豈不恨哉一是以天台子徒被滅者法相杜留為何  
凡倫師之論甲乙者則是兄弟也淨也曰衣之佛法  
欲蔑如者寧非魔軍之企哉非喜之可及尤可



相淨者也是二次吳域ハハ本朝之時推川弓馬之類  
勞力苦身雖平皇歆拙賞以不過千金万石官位  
未心不及子孫兄才是三次我朝之古者武之道授了  
位事無之既天當家天平中守大野東人毛切會  
首絶弘未座是四次弘仁中守坂上將軍を拂奥  
州早活と復平城之測除至加九令無界三人是五  
次清盛入后者平氏糟糠武家塵芥之祖父正盛七  
仕威人其位家執諸國受領之鞭大威令為虜為加  
州之刺史古補檢非遣使是六次修理大夫孫季公為攝

六太守之昔代馬屋の為職是七次親父忠盛昇殿之  
時都鄙老の皆惜蓬壺之瓊瑤内外之英豪各依馬臺  
之籤文忠盛至刑青雲之翅世人於今皆白之種惜名  
青侍莫在其家是八次平治元友正吾信賴令謀叛之  
時大上天皇感合戰之切切被行不次賞之時高仁昇  
相國意幼兵於方子之式名台射連羽林女子侍中宮  
職式准后兼宣兒才庶子皆步玉路其孫彼甥悉  
割竹府是九加之通依九石不并芳賀納官進退  
而司皆為奴婢僕從一毛凌心者能垂白皇云禁之



重片言達耳雖為云云擲之會是於爰將首之爰為  
延若一旦之身命欲道片時龍之苦万乘至玉猶成  
西辰媚重代君還致厚時七考之禮臨大棄代々相  
傳之家領上裁恕命卷舌未取宮上相兼之庄蓮  
將權威無云采勝之條其驕倍增是十次去年十月  
追補太上皇之樓抄掠種々之賊室押流博陸云之  
身棄取國左漢謀逆之甚誠絕古今其時  
我亦次以向彼凡不同其罪是十然与或相重神慮或  
依祿皇憲抑背陶送光陰之間清盛入寺重起軍

去寺因一院中二親王宮之氣八幡三所加茂春日權現  
速岳氣向捧鉢彌送其寺奉願新羅權現之氣寺  
因樞皇法不の云之旨明白也是十二隨捨貴寺命奉  
守護之條念識之類准不被也喜我不在寺遠弑感  
其情之氣清盛入寺重起兵苦願并入貴寺之由幽  
以兼及無致用意為成与力廿一日辰旦起大氣回  
廿三日悽送諸寺不知未寺詞軍士之後念一時後  
飛來青島投一芳緘救日之散是十三次彼唐家禁念一時皆散是十三次彼唐  
家清涼山之家京尚還此別之官兵况和國南北兩



門之群鬼徒蓋步拂謀良之群類能固良寧左右  
之陣宜我黨侍進發之告者詠鬼儀牒送如件

請察狀莫成疑始之故牒

治承四年五月廿五日

都維那法師祐實

權寺主大法師俊範

寺主大法師顯威

權上座法橋上人位禪慶

上座法橋上人位朝觀

源三位入道馳參三井寺事

廿日今夜三位入道賴政子息伴豆守仲綱源大夫判官  
兼總三部三位判友代賴實六条藏人仲家同子息藏人太  
高長光侍上渡邊黨授援をて彼の兵滑都をて彼の次  
師與アツク右馬亮ツク續源太丁ノ七唱清をを始して三  
而してみる三井寺ノ地系を以て六条藏人トヤハ父帶刀  
先生義加くて礼て後みかくて互々を三位入  
道登りかひりけりとの也無けりなり三位入道の  
實子なり何れ三位判友代トヤハ舍り入り源藏人



大夫頼朝の四男として有りあるを幼より叔父の三位  
入彦取と賞いしくして仲得の御女とておいを嘗  
み奉りけりとは南へ三位入彦とありとに傳ゆ  
ありける中に入彦も自ら頼朝より大事と思はる  
三田原原太の末孫競はただ口と云者もけり本  
家此三男也右大將は家所を六条この家の名は  
ら繁地の中競の家とけり三位入彦寺へ参  
りける時侍共此おつと先はちやと申けり入彦  
心も口も加くと志す也たふは少く一以下

資妙雜を東西南北に持たしめると家は大將  
や一人すすけるもこれ追ふも一人すす  
先はけり少く社をうまかると一黨引らしと  
あり

競は三井寺参事

入彦は女としてありけり三位入彦は三  
井寺参事けり是に何れのとて内へみせけり  
是にけり中はこれと競めせとて参事して大將た  
すけりといふ三位入彦は宮の御りた三井寺へ参りけり



ありけるを競かけらばお徳の手を告ぐれいと参りけ  
のそ矢方のの 禮北の程の事に心を置く告ぐれいと  
さらんに系一現に心を置く告ぐれいと  
かけれと大将の心かしくと三位入后に度ふれけま  
と中より競は渡り堂にしく一王城才一は美男也  
右大将はさうはさうちより朝夕出入するをさうと  
思ひければ間此おさうと和教宗盛を頼られ  
へ三位入后七志給はるん思にさめおさうと現世と  
ありければ競かけらばさうとさうとさうとさうと

先神系したる引生物としてあしける馬の心とくたがし  
れとさう康気ある馬といひありのりりと能く置くさうと競  
かけらば黒いを白身にさうとさうとさうとさうと  
はさうとさうとさうとさうと木下凡さうとさうと成らばや川用  
此時に進むさうとさうとさうとさうと一定さうと  
あいに成りさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
れと木の丸を競にさうとさうとさうとさうと其後大将が  
あつとさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと  
やけけるありさうとさうとさうとさうとさうとさうとさうと



木の丸に競のろのけの馬に棄つへのころは棄  
て家の子三騎御小二騎我身より六騎はれさした  
ころに大時及此其門のあを下馬りせず見入  
ると通りける大時及七侍左是をみくせさうい此れあふ  
せ此御所より今朝のころ足は馬の中木の丸に  
競身をのころに棄つその重を棄せて家の子三騎  
御小二騎我身共二二流連て此所の川を下馬り  
仕りてころりい昔懐にさる追うけて一矢射ふは  
やとけれ右大時たすいけり競を刺ゆる強弓射

兵矢川に棄つる現あるをやとくころころとて  
廿四さしそあひたり追うけたうをゆる加う乃者そ  
ころ合えたりころん程は矢つかをゆしてわら  
者にてゆんあれ宗盛かと思ふ侍共共五人も  
一定のあひゆんあんせやう乃者れ者たのあけをとあ  
せせとあひけるゆれをまよははたがくて三井寺の  
ころと池系る競あはれ参りてころとゆれを三位入る  
れをゆれとを宮にゆる同僚共につけるは皇下なる藤原を  
年未初日が一たにて死んとあを焚くにふと競にた



告りのけをとりわけれと三位入及後れかつけたる今  
白盃に告たると女もろ人(志せいせうく東西南北)をこ  
ひつろんはと大將に剛にけられ競にまら加する  
あつものなれと追ふ系らんすうとゆゑにけられお告  
わあひと口にはけられお告すうと地志と思はれお告  
けしけれとけしけれ又もけれと競社以外のけすみして  
系りまら(大將)をるれといつる競系りてとくと  
宗盛はたの光といふ畏うける思と返事やてゆはれ  
大將が犬に悦ぶゆゑ毛る馬と黒うけの馬と二足

よに鞍置るまていつる間黒馬の急よ加むる處にたてゆ  
伊豆や後より系りてゆゑ木の丸のむに成るお用  
七時と進上の由とやてゆゑ大將ゆけにて木の  
丸をまての間系りて系るゆゑはれと競を君り  
まなれまゝして他門はけのたものと大將がえの  
うん事おたゆゑあつるゆゑゆゑのつらと高きにかきれ  
人と一同とつと笑り伊豆を富ひけるは一定ゆゑの  
ゆ木の丸をらなてまぬいたる仲徳にその馬えさせ  
ゆゑのたゆゑは河あつるゆゑを引進たり伊豆守











て以てちと昔話をり（？）たる事社いとおくけ礼と  
持競をかの合けり

### 山川心變事

山川をひり南都の大衆同心のり（？）其の廟（？）のり  
山と大政入る座主めんらん僧正を叩ひおさるひ  
女をを江米万石往來にたせらるうち志ににをみの  
尺取三千じたのひ整へとのあせて谷（？）坊（？）小四足十  
尺（？）かけ合られり米路をおさる（？）帖云

菴城寺者本是可謂謀叛之地誠哉此車非寺

之訥非令之訥詔八逆之輩忽失皇法欲滅佛法  
早今日中企登山勅定之趣仰謝衆徒内訥善神外  
降伏愚亡耳抑深懸慮念於叡山盡戒一寺於一  
州其上以兵甲防凶徒定隱遁山上欵以此之旨（？）  
被守護者尤可宜守院宣之趣狀如斯仍言  
上如件

治承四年五月廿五日

左中弁行隆奉

謹上

山産主御房



と書きたりける是に於て座主さうさんくゝひて鬼徒  
をなす免せしむのいけ礼と山川弥与カセたりけり  
山川心ありく礼と南都大生座主經一卷實語教  
一卷作<sup>根</sup>招本中堂に送置欲心貪着如説經  
尔時座主告三千人曰大衆に告て此言のえ、汝等能算  
けり是を思念せよ米一万石織舒結三千疋、大衆の身  
にありて預ひても預ひつゝれたる也我是以ち後くは  
結末を以氣に預へんと思ふや事、大衆の心におありい  
らんすすまきいもく我今ににおありて大利益を得て心す

大い言んたをさす唯縁うもくと座主其故を説り(時に  
座主説との縁もく汝等三井寺の大衆に上を述べ事  
ふん化教のしくなると我言ん既す氣のいそみ  
又いむ(思替の時大衆せつものしく三井寺乃大衆より礼  
しんをたの時座主諸の結末をりて大衆に手呪  
説云

唵山法師有衣有りや米有りやをりて以て  
さるや替との

實語教 一卷



山言此の故よきつとわらん 僧の心をたつとらん  
僧あつたる故よきつとらん ちちの心を貴くせん  
かりけんとせんのもろろ 身めつれと別共にやらん  
ちちと是万代にたす 命おろれも失する事か  
倉内れ室とつらき事有 身中の恥とつらき事か  
よらと是一生のちち 恥おれを以て悪人とん  
四大口ふおとれつて 三とうやま  
うらの故よ書を讀まがらし 学文はつに恥を つめに  
祢新をせ替まつて夜討を好 ちちを思て城をさるるま

四等れおひふとろん 海をたれを得か  
師よ老といとも思はず ちちに老といとも恥す  
師君にち孝志 木石にちとあらん  
父母は祢に向んす ちちをちちとあらん  
みんをせ人よのす 妻子おえせおほとらん  
是学文はけしのも也 命終とも思ふ事あるれ  
一条仙子と名付けてん 一文あつたのたう也  
二文系りと名付けてり このうけたち山ほらん  
三井七塔舎を焼てん 三法の名うを定けれ



四海にいつても朝夕に  
五たに法をいふ悪行と  
六えんむれすのこにえ  
七社に神樂をまつて社  
八宗と名をたに何と社と  
九重にやいをする所は  
十種供をうに事をして  
而姓おとて物をとる  
きんきんにやうきんきん礼と

四ちうけんをたおうけり  
九常事うしれとい也  
六をうに社はつてもれ  
七は諸國へふりおれ  
八謙とした物をたふく  
公おせんたにのらむおく  
十方施全にすめめし  
十種供をいおせのいも七  
隠病一のき武者也

歸命頂礼平將軍

今日より我を捨すして

生世よ信はつ

女よつよよものをあや

又なりけりいふ歌二首

山けりいふの衣をうして恥をとえこせおしりて  
山けりいふをいひかきうわつたていし此所おれ  
此事治中にあてて乃きりあけりあやれたは中  
のきふらちのきをもき大氣とほはやくけるおれなり物  
もきりける山けりいふりけるとのや

おれん(か)切りえぬ我らきうそを恥をかかおれん入我



源三位入彦山内をみせたりける事を聞てかくせよと  
けり

たれ本ある銭糸ののびたつやとのその年の食も

### 白三井寺擬押寄六波羅事

年上にもよ大政入彦乃岩氣西八幡の幸ある新院  
日此是にやせらせ給ひ次しく何しかりけ化も世乃す  
たより及をんとの外にせもたて遊歩へし心こく此あ  
後にも軍兵敷千給あつては多堀川院は永保  
三乙土月八日いもいかり西社に祈奉の園城寺の悪

せんらくすしとゆしとて前の陸奥守より家  
箒をたしして軍兵三千奈給お具して山嶽乃前後  
右備前七陣にいしを衆万人のをお給りしはこれ  
にやしにを奉此の幸御幸に兵あ後には仕を海  
れ同サ三源三位入彦頼政寺よりいけりかう候て大政  
入彦を夜よりいせんとして志にける老僧たちを引具し  
如意の峯を一千人をとりし明松をとりて何し  
か白川此を家中に候しし火をよせんに  
は中りその武者も軍をよひて池向を矢も射す



勢て岩城橋の下へ引向うて戦場にたゞのさき百人を  
指遠て六つ入て風より火をうけて入るを射ん  
事さうりあるかゝると申る此を志すかゝり山川の  
大衆も心をあつて平野の南都の大衆もあつてはま  
びすみすつをのれりといふにそへ貝鐘をのりしけ  
れと鎌倉に大衆發向してせんたすそ外は政令を  
せいのりの師一如席の志あり志海や子日高共十余人引  
てせんたの危しをいふと申るゆゑ多うに申あはれお國の方  
人と申る思はれんきと一方人より申る川原此名とい

我寺等の耻といひてうりんと申るをいふんすす(此  
又ふぶる名をかきそりていふ昔源平両家左右はは  
さうてたういふ威勢をいふいふ共近來は源氏く  
をわうかとりて運命つたをいひていふ今も大政入る  
一天四海を守護し天下のちりて威をいふぬ草木  
となく肉をかたはれありさまをいひまたすすく火勢  
をいひ思かいらつたに何らす但蚊虻をにらむ蟻螂車  
をいひすすといふ事の礼とせんにいふ教やうけい各  
指勢をいふかゝりてをかりてを外にめりて後日の



内は初に記にさひつと初をさきんを長せん記をすつたに  
せうきん坊の初よりいさう長くかきつたにからつた大なる  
うち力あつてすみ出でてやけるにせう出を外にいとせ（記  
に何るにあら本願清見系天皇大友代王子におそをれて  
吉野山を出せりいそ大和の國宮多し都をすたれせめひ  
けりにと上下十七跡とせよる伊勢伊弉を跨てみのおんり  
北境をりしつてみのとあふみの境河とよかををたてて  
大友の皇子と戦ひつた北川ちち無く流れたりたり北に  
よりして北河をと黒無川とせりてはわき宮に勝たり

と我中傳（たり窮きつた）と北川入れと志んらん初をれ世  
心つといふ本文つりかきつてけがらひ北宮此寺を頼りて入せ  
おんきつたらんにつてう力を合まらせける（に余は  
志んらんくつた）と弟子をうにせ入て大政入るの昔もて  
系せりといはれたる圓滿院は太補といふ悪僧ありて  
とやけるとせんをいそ多く五月のふくつた初とにたか  
ういかにあつたとくくおんといふにたかつ如意教を  
と源三位入道相政系圓坊の初志やと慶秀帥の法印  
系智持けつ子義法禅永白河よりして孝孫の滝引くし



て来りしを以て老がともる千余人に本を明を以て  
白河一向いりる

孟嘗君の事

六条の事とてけしん院の太補才子のく土佐也  
ついで坊白流才子伴の坊園端院は太補是亦三  
人の抄物也てり可矢取てり一人當千の荒儒也留等  
院に之因幡の堅者也夫去井の肥後すは六部  
坊より島にの志すり心の院に之令光院六天狗式乃太補緒  
登加賀佐渡佐後等也常喜院の鬼土佐筒井法師に之の

の志すり思ふ納言かやに筑前南勝院の肥後日庵定雲  
四部房大箭所定後中院の但馬桑園坊乃の劇利坊  
六七人中加賀光業坊形部坊一来法師是亦十人  
たる兵たてりる堂宛に之は、井の志す妙めりし  
ん小倉守月尊堂慈度樂任令おかり源水坊武吉六  
伴三守仲綱源支利支其片り六条藏人仲家藏人  
太郎渡邊は名播たれは命築しけりとの言ははく  
源太郎を以て境のゆふ右馬亮長七とありをらすむを  
始して七百人ありしとて之を向ら如意のみはこれに



と進み其故宮寺へ入御の後大関小関を堀  
切あり本を引たりれたはあり本取れけ揚後  
ふとすり後小時刻押うつりて冥路の夜を鳴り仲徳  
わけるは昔月れみしう夜をれた既に明かんとん世  
にて多勢を打ちまは夜討おきよかり北早を討ま  
とく若攻めつと中れは圓滿院へ大捕進出てやける  
は宋朝は三百六十ヶ國の地とらんとくは軍是を分つ  
けて孟堂老といふ威勢した勝て三千人を朝夕に言使え  
昼夜を<sup>に</sup>經營す時の事々々や上のこま事いにおとるん

朝怒なりかんせん人の徳してをりあくせんやあひ  
世に勝たり批白求衣といふものをりうしやう若ひをり  
又持たりけるを素の照玉此事を漸りいて素持れあをく  
現う我にえあせしものりいけれは我身においては身一  
れたうと思れとも果を<sup>て</sup>すはあさひかんと思てあ  
はく<sup>は</sup>照玉にふし則友庫に納てけりまうを孟  
堂老あひりを極る間破却に志よあらるしとてたあ  
すらに<sup>は</sup>敵と成孟堂君の求衣を失ひたる事あ  
らぬ事として別れ食事をを免て求衣おし此事をか



十たより此人心は物記賢者にて推し能き者を三仕ひりり何り  
いと危きの時子をする者何り何れは犬のあはるすんす  
者何り何れは盗に長くたる者何り何れの中にも季  
夫丁といふ者盗に長せりた、狐の衣を盗てまじ  
といひけれともいふ事君大に信て事夫丁をつらん  
照玉の方につてわう室を事故なく用ゑかの衣衣を盗  
山と孟せい君にちり我朝敵と取あの上は志んす  
事何れを危くんとて三千人の客を引くして落てゆ  
常に長洞山龍頭山竹葉山明谷山拾炭山ふといふ所、

にてた、いふ事十々小廿七度におくといふものも  
討勝と通り行程に今既牛山を打過く丞谷関にうり  
城戸五河の上の木戸をと丞谷石関と云是と日夜を嫌まん  
是勝院羅尼を誦する者をと削て通す関と云たにか  
乃中に高石といふ兵のり文武両度た武者也尊勝た  
たを七石といふたりけれと謀をもつてはのと通す  
中二の城戸に甲冑をよび出ひく矢を帯て通す  
は、いふ所是はすにわうと云んた関といふた心をも志く  
云者の是は聖とぬはらふかす武たにもせり又たの



身の力を八十三言入。力也蓋せうんくの号前兵杖甲  
書をその所ののて大旨入て是は八百聖教化第と  
号していた、此ののちたをうきんに向て連り一上  
東城悟故十方空す東西何所を南北朝今朝来近地  
してかゝる氣す何ん何んいんて関の戸をとりつる也  
と云関守答て云う書を答よ入て持兵杖をきりして禍  
を好むまにをたてと通す（うんといふたはもうきり）  
答て云う則山徒に何ん九きり山の氣徒と名てする氣  
と一山の氣也持氣は聖教化第也是をよよとて関の戸

に當りたれや大地志んのことと関をたてるといふ見とて戸  
関前にすゝとくけ通るが乃後さかばやを帶せりかのとく  
藝能一つ、何の客と此是主のせんたにんするたの也との中に  
文武二居にけかよとん事と草のとも、然る大食大酒也  
此れ共心むとのけけすて合戦と闘ては一人先をせん  
と勇る事とに余人にあたり侍事是をみておき  
し事限かすとの名を窮しと兵糧米の費えへ又力  
人のるをりしむる若也先を筆とつともサハケ度のためひし  
向て此の意なり、三百をりて無用とより君りまありし







比戸をひくつらう間夜る明を待程ふけりふちのじて  
孟嘗君の座の座を乃く礼にたり是則語つ徳を成れ  
と人をおぼむりふちのゆたれ成りしり貴すつらけりし  
思ひり今命を助り事あるは是れ志ん去上吉なり合致の  
うち治はつりおとかくのともし志れと一如坊のともりとは  
関路の勢をあらせつらん夜をもうり馬を振りしあへしと  
てとらふ火をたほし書あり中夜も夜をたつ明  
たりけれと是れ一如坊の長せん此の志ん去也と加の坊へ  
おしとめてたり掛ひ一如坊中子とせられたりひる程に

同窓多く討れ小巻

小枝蟬折御笛之事

向階梨不ほりく六原へゆ向え此うをうつとよ  
六をうたはりとうの池系たりなる境ありとめりやこの  
はまを山に大氣をかせをうて志んくやらせり(此山  
川をかせけりけれと寺中にてと叶うしと中(南都)  
趣うせりひりたなり次は合堂に由寺あり此宮と小えし  
蟬折と云ふの由笛をとりせめたり是蟬折を孫郎にを給  
ふ此山笛の鳥羽院由時おとを千両唐士の由門はあしせ



ありたりと礼をせの由返報と思へて漢竹一を在替あり  
院にありし思へて三井寺の法華院僧正光祐に  
作きたん乃上三して七日加持五にて齋幣ら礼たり  
ら由ふえ也あふ後けの由抱乃時に三法礼す由賀の  
五ける高李中納言實平の給てそつ池たりけるに由抱ハ  
てこ通れすよ思ひいさの下に置て又取出さるんを  
せられり礼と笛しゆのてや思けんをのつておとてせ  
みをおけてり希代たふく何事は是より人や先より  
て彼山笛を蟬おと名付られたり高倉宮言んんに世

てりしをりいさるうへと殊文山笛の上よりせりし  
礼を後白河法皇よりりせりけりける也由加ふを執  
心ありく思言れたりしとも龍花の徳湯乃為とあ思  
るん終然万秋末を向とせしれて後其を元を録節  
にもせりしり終のち何の雲客曰吉らまらで、初張  
に下向しけるも三井寺た笛の音の志り礼と志をしく  
かすといて三剛々礼と故宮の蟬おの事ふせまゝして子  
細を尋たり礼と金堂枕の慶後、何割梨花の比笛、かく  
児をもちたりけるし時ふ地出、やんを取出して、あせり



リ少くは少く知たりる人うふ大氣此筆をゆつて此の筆を  
おぼせりする事、何れかんとて其時を初て一和尚の筆  
を納れて園城寺に宝抄の今の一あり今より  
にや

### 宇治橋軍乃事

兼園坊の署録の志は、此の枝小すすす、  
出まつけりよまひは、あんにたけて、  
身がていふ供にもまひり、  
俊秀房と法師と、  
山内次友刑部

悪俊みちと者七子息父を平治の乱乃時義朝供に  
て且糸河原にとういれ、  
る度秀の跡、  
ていよてれの法、  
糸りていと思、  
久礼と文是を、  
たれにい、  
はせり、  
都合三百、



山馬ぶがうおせしあせりして寺と宮治との間にて六度まで  
山馬の世々人枕尻を中ける此程もあつて福を  
あはせり家社とて宮治楊を中三間中引て志をく  
宗等院に三入せあひて此方するを家是を以て軍兵  
を差して是を追代せり別左兵衛経知盛藏人取  
重衡朝臣新の將盜盛朝臣権亮が將維盛中宮亮  
連盛左の將清經朝臣左馬頭清盛三河守知度藤  
守忠度侍以上経介忠清飛禪守景家河内守康  
綱飛禪此判官景高上総太郎忠経等あり乃三郎左門

尉有國以上三方所木を山をばせ越く宗等院は  
向いなる軍兵已に雲霞はてくくを馳来るとして程あ  
ゆら宗等院に於て此の事とみまけれ馬の程を  
とて此をいふ事三度也三位入る事も思ふにける事  
なれども此をいふ事三回以上にして此をいふ事  
家の方か上総介忠清討ちの先陣つけ多て三回以上此  
勢にて楊の上はすなける宮の上方に三井寺の愚僧  
筒井の淫妙めい志ゆんといふの自門他門に由はれ  
たる者也楊の上はすなける方飛向いけ礼明志ゆん事



を好て将衣束しけり禍衣此遣ひたれし黒系かこし  
七大河の此遣にさうははあるやかばうしたるをかこり  
高小おひかこし七曲ナモリしたる黒峰上は号持三尺寺此時  
河しかき一秩父一勢し時上野新田入居を頼てか  
免てをあすん大の長沢の渡をすかしの心はあ我  
粉七かりしと云氣をワいんとすれとあふ方カ五白  
よせの舟を河系に引つけられて新田やりのをせ  
てうに人にたのせれき今日乃軍のからめてにす  
者款に舟をさしなれとてあにむつる河の

あつとこり志しきりし思ひらせれん事かあ  
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
たのせやして兵部奈崎七勢にて馬つたを作りて  
くはし其日大軍にて勝りしれは新田やりのせ  
あつたうらうらうらうらうらうらうらうら  
わのやこりうらうらうらうらうらうらうら  
者共足利うらうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうらうらうら







何の詮なきに歎る事幾ある付之今言はしめて其死  
勝負を交せしむる一途に何れを付。唐土天ちく  
の兵をさくふより渡されし終り各々大事少  
事共にすも人すれ昔ちふ足利と中を遠て度と合  
戦をさしり武藏と上野とありて戸根川とて大の  
より合戦は為小よする時と瀬をさしてやせりお  
川る時とありせしむる渡り人よりあはす馬に死  
す何れよりして矢切決定はたちて命とてい礼は是ハ三井  
寺才一は大夫をいふれどもいふ礼と其の口也

をい持より危物きて一番にこれ也信濃北國  
此住人吉田安友右馬亮は三原お三千葉三部小三河に  
にて押寄たり十葉三部うちうちといは物て引退  
平家此軍兵治えし此の治めたるをいふて  
うち三たりける橋の上をほり渡りはてしむる  
河の上に出みけれおつ川にたちてすくす  
はとす橋を三間引たり言をいふは陳の戦か  
におあはて先陣二面余れ又河へ入し危き乃ち終ひま  
色のお印は治河にうたふりけれ嵐のあまを心のまに



吹ちりしなるは似りたるその中に伊七國住人吉市白  
四堂の館六部を原同十部を景黒田後平以上  
三騎馬を有して火をとく此未多し此あり武者河  
は流れてるぬぬ志のぬぬと細代にふれかてて  
吾のものも若のはあまた祿ちきておれし若舟で浮  
たりおる時三位入后かくる中なる

伊勢武者をみか緋をとく此鑑死て守治城ありかき

足利又太郎守治河渡事

忠清引くかき知盛はゆまらと今日軍は合出せ

いとまろくしとてえんいもの此河をみかき青丸の比て  
先にとちこれけり河勢方たちてそかきこれに治治の  
勢におはれえ先治二つよれたおととれをえにたり  
此おれにのゆえりて二人のなにして大事のよを有  
え此ををもちのゆてお守院乃後いそよめれぬ置をか  
りうけり夫をこのおとみれと守守府大事のよを有  
すよら教を志る此軍をみれりしとて見す  
お衣うちれたがうゆひてお切をりて見はつれて南  
此河院仙とてよ良の守り此に危渡ア堂お人



甲に二人づゝれぬ十人といた手を肩のこりなま  
おいとみかゝりてそ共引提きて是攻たり上総  
乃女忠清討ふ此先陣を此橋の上へむいたり此共  
明寺一人の為小或と討化或は斬られぬと云  
上総向ふなりて引攻同寺此向く僧大矢此後定但馬坊  
は中家此先陣引のすをみて黒色おとす此後い  
を此大寺の大長刀は弟此のよくちを待て橋の  
上をけりわたりて斬りしらく長刀をとりて橋通り  
ける中家此くの矢先を拵てこれを射る下る矢をハ

おとす(一)のふ矢をぎううつおれおとす一旬い  
てくる矢をと切落すよまにふる矢をも切り化を時此  
かまた二箇次第を拵切たりける向く敵十余人切絶  
す此れはけりも拵やすく入たりける衆人おそれて  
一人のやいらけりける生年十七也なりける末法師かも  
おれすやりのちとよりつういけける長刀をさ  
なりたりとけけいけれおそを登る物のかすけれ  
とよ八人追なれや一丸人と云ふ長刀のぬれれかか  
りし者危うて太刀を抜きたのいける太刀にて四人切ふ



皆其人より不勝りし事ありて世のいひゆる歌のうを  
此真甲を強りしり多程と免ぬればより打斬く  
太刀を河内河つと入今とたのむ正と腰刀斗しきら  
くれつれそ刀乃つりよと打斬くくおとりしてと立  
たりたる後ある一事法師の後う口たよりつと出さ  
前に立れりてとあせたる後くせとして三位入を  
七郎と後アを著るく河つれ月つつく河とをれり  
十進むを始として一千字小名兼しゆて廿三人は後  
りけりめい事人是を後ふたして志清う三而奈騎の

勢とたういなる三十余騎大畧明俊一人して討取  
るが化と所引志と地れたるを平家は太極是をみて  
先陳れ討つと七をくまをみとらりて礼也と合給よ  
とて家ありとけりの上を馳りある爰にと歌  
れよ本らきりやすらすかといひもすす二石とれ我太  
刀と總のつきの志り所や入てけけりたり三枚甲拵首  
にれか一好む長刀とくくしてかす果の馬のやく  
たぐす一地不黒鞍置と兼たりとら同宿十余人皆  
同一色の襦衣れいりてれよと後る色おとりの鑑記



たり河のほとり二十余人回黒はかきし。は巻れて橋  
れ上つゆい平向ふ中なるをいしたる業巧者にてかけ  
れとをうばうもせりし。同井此降妙鬼志人  
とて軍を陣守にまうされか。我と思ふ人。明後に  
向ふやと引たる橋たいてををいそ。平時に射会たり  
其さうしにら夫を敵一人おぼろし。て土人にも負せ  
て夫一えをくく。砂にり明後夫をいし。——や。り。及  
原考もくく。はをい。光よ其故をい。此の楯に我を  
たて敵の夫我たてよ。く。て。ら。れ。て。い。つ。勝。負。は。い。も

二、十橋の上のに。い。い。明後命を控て勝負す。つ  
は。い。ん。と。思。ふ。人。こ。の。を。い。つ。け。や。し。辛。う。に。馬。の。走  
り。て。を。か。り。と。か。れ。す。て。ま。の。北。に。い。よ。と。千。載。ち  
の。ま。ひ。ら。を。と。ん。控。て。つ。も。思。は。て。お。母。長。刀。を。あ  
り。て。左。に。腕。ま。い。も。り。ん。て。あ。い。け。の。紐。を。り。り。合  
せて。雷。の。志。出。候。を。い。い。や。け。て。橋。の。ひ。き。い。を。ほ。り。り。を  
て。敵。三。百。人。中。へ。向。て。入。る。り。人。の。一。条。二。条。の。大。旗。を  
た。は。て。よ。弱。丸。馬。を。ま。り。て。ま。り。せ。ま。す。り。い。を。ま。り。く  
て。心。を。ま。り。く。の。先。ち。馬。の。尾。に。ま。り。げ。ま。を。か。り。ん







かひなくして志げ後のそのやん中九てれんせんか  
毛の馬の七寸にまうくあうにすうれた白あまんのす  
置くや年になりけりや事院此後おきてみるおの  
あつた国すつひてやらるに今此河をさくらせて若をを何  
者若君とより喜しくされぬ一是は昔兼平の此朝敵討つて  
帝王のいんまんと今若を後代おけていへば後大考に  
此後下井四任人足利九又太師志徳童名王法師生年十  
七才半志す大事にあら事三度すいふくくを  
はつらんこれ世に官位の身す考にむひさいもて

子引矢を放ちりん事神慮はは思つてよあま  
かうんゆ共大政入る友出使すゆゆにそんも真が  
入る友に帰しんま今の先陣にわすはたつが海して  
源三位入る友はん衆に入らむとしてやうて川の中へせめ  
入らる是をみくや家此軍兵我りくくやさしける三万衆  
これ大城一度に河より入らりれはと大城かにせれて水  
あれやゆ志をくくくみてそん中の瀬をさる  
難くかとははる老の志すし思つてやうつや事  
跡ふらよの川の案内り志らぬ者共の世をまや人やといれ



奇のよはるものむ水にちかたまたまうす流れを改是  
ハ言ふに流れにちかたのふかきヤリつたにちかた  
大勢大畧渡りけりし宮は昔は兵三而もんを中  
取出のてはうす言入る程改を長結の直意に志かふまじ  
れよらひとさきふをうらりと思もれけりしやうと  
をいれりし子思伊豆子仲徳赤地のうすたのひ  
たふれたに黒うしかとくひのひさして是る矢つら  
長引んぬ小雷をたにまりける言ふ深美村宿意は  
ちかたはすくしのひたれし火をくひのひさひに言

乃ちかしてして志う河の馬を乗たりける兵  
藏人父子やいふへの命ふ共我りくと命をおし  
れたるひさし此周小宮のひさせぬいさかを平家  
は大勢せぬくアなれと意は父を延らんと通合てたが  
ひさし程ふ子得大事のほ負て鞭を向けてたふ良跡を  
いさか前々を止徳止大御利名忠徳とて百孝  
はせしめてけるに前々も深美村宿意とておし  
たれいさかしてくひのひさありしよらひの屋をハ  
よらにみせしをすにるやうし合ふといひ



責うをけれ是の宮此世もいにしゑの世もいひたれを敬  
業にせぬよりこれこそ叶ふと思ふん我身お  
具しそたに土給の世のける馬のしれを引つて  
十文字につけ入たりけれ中をゆけてまつと返す人  
りむとのなりけりけれ三根三根にまんににをゆけ  
りけりた、是をみて流れて村たりけれ、愈徳ゆ  
うあををいせてかひらむれうけるをを忠徳うやを次  
節にすんはる大かこるう押あつて但てあらぬ兵てお  
さたりけれ志をく首をうさりなるを忠徳う節

高合てよらい七草すりをたみて二刀さたりけれ  
内うあもいひをすうにらる上かかされてぞい  
らうさりけを首て切てけり

源三位入道父子自害事

三位入道此れをいふすすか福つか、引つてすをみてお  
かしく引返して家次の大勢を度、河を、追のむ  
て欲ゆめ、討ちを命せてせん、合致とせし  
けり、化けら此方たわく、て、當り、たせん、せし  
うも七十に、索つて、今、其、身も、その、所、に、お、と、り



矢つまみしうさりたり花共あての人し似せりけり  
矢ありては志まらうさかせたと云すさかし矢に祐者つ  
くしくて太刀を種てとしり世も程ふ右のひあふし  
十の何てのち花をあまて河原をさきり花ふ節ふ  
七まふかきて平家院のつ花を入にける仲まきも  
父のりした田引花をぬ浪ぬたきちへ六条藏人仲茂  
三位入右の陣へ使をたてし中右の御物本たうまひし  
せしつ井花をぬ終に侍原美判官後とすふ花れ  
りひぬさるふ山念井中さか(中)そ山供仕しんといひし

たりけれ花の時入右今うさかさんちんと思て命ふ花ふ  
ふせ起夫のせして白雲せんといへるえちの肉より小  
破をぬせしつう夜のもくわかくそあまらぬん

斗のし本の花咲きもたのしひ身のあらはてせ  
表せり

此時かしの舟しむししとよきえしひのともちの時とせし  
らるふ花とぬれはけてはアのつ七郎をぬて是を計て  
といふ主のせしひさるふすうにかもやくえては  
らして太刀をさう中りたりけれ入る太刀を種す仲  
夏夜自害ししころくすか是の後代の物といふとて



伊豆の志も中は競高以下の母孫より者より、まゝい一つおち  
つた者おちたより中河也は昔は河やと有りけるも境はあふれ  
り伊豆の方も伊豆の志の住人より家部五部として兄弟有る  
り高のより其中に就けるを大御家よりぬるよりして軍  
兵おちるる氣にてぬいすて競生持にせよの志なり

伊豆の志も中は競高以下の母孫より者より、まゝい一つおち  
つた者おちたより中河也は昔は河やと有りけるも境はあふれ  
り伊豆の方も伊豆の志の住人より家部五部として兄弟有る  
り高のより其中に就けるを大御家よりぬるよりして軍  
兵おちるる氣にてぬいすて競生持にせよの志なり



にて是を切らしよもの花の侍おすいせんにんたけたり  
花は競先に心けて競ふるれと心いしそ七十一度も  
耻をなすれものをも思切てさるる戦ひて敵河やま  
おきて志くひしてより人語花より者も守治橋にお  
とふ花をあらしてに取て余と惜ますたふひり二人此  
子供取きて三位入る者も伊をちあも此自害らぬとや  
久に入る者には流うたさるれらるともむれとて七唱  
つれまひしてせてらと花はあて心あはる者もと母に  
敵小こころも事りゆめと軍をたせて中あぬれを  
と

と出程小あしくとておをを二音よみたりけり

君の為小身をばはやくとせ程ふ世をう流川と名をば

いひつれと自害せんといけを二人の子供左をばお取  
おしをかしめてあか力及ておま三橋にてあまう栗子山の  
まうけしをけしていう思ふん者いひけると抑そ矢とる者  
此契りをつんすやうや阿る三位入る者も二心にてと出契  
り有つ余今方者も守等院にて志くひりひぬはぶくのひ  
る契りを出しやう流るる出た思ふしとれたとも人このおの  
るとの日本國をこまらたふけたりいつをへけたりともあ



くたろーとあつたてて自害して入乃庵に追  
つたさうせんの子の京とくく仁三の無齋及（素る）  
しすの頼り人こわすれはいつらもやまをよして  
おのこ身いしを脚りて無齋佐成此出有るをみる  
てすいらせよ者、後世をもとやうとて志しせんとい  
れと二人の子供我等とまに志のいせんといなりあは  
えあの子供此命をうしかもん事物うまへしとて思ひわ  
らいてるたりけるいとくく物で水はかしく受るはいつ  
せんといひれといふ志のたたりはる事有らんとして二

人此子供谷はけりりりてあを求む者水のりて死しと  
いひけり子供をせんとものりしと也二人此子供たり  
けり煮た物のをぬれ扱て念佛を痛中とてくく腹を  
切て死す二人此子供谷にけりて小川の有る煮るあを  
くみてけり物りかすれと白くむらをぬれけり  
谷川をけりて水をとる及をん父の足も小流の地て夢  
て死すれの水を平くむる及をん父の足も小流の地て夢  
もあや子治るにりすれを攻事するやいともん力及子  
て空した人のそをのれ無しとて後世のむられの神小







と口すきませて光明山にすくはせ給はる飛驒の判  
官景之宮の先とせりいねとみてけれと平景院の軍を  
はら十<sup>て</sup>宮の由給ふつ<sup>て</sup>追なりける程は光明山の  
鳥井にありて追舟なり部太遠矢にあら程ふか矢  
宮の由はは腹ふ沖りて四馬かけつはまに宮ふせりいぬ  
り由はくつあけられす法師の禪波の由志やとそん  
と云ける者由依に有らう此程宮に思背養うせと由  
をくはり長緒の衣より神しく志は経巻を三徳入  
たれむすの馬ゆら麻乞にをきりける此馬にきて由

供すく<sup>く</sup>とてえりけるとのや芳宮馬より飛下て宮をく<sup>く</sup>  
希<sup>く</sup>せて有れも物も修<sup>く</sup>れすくは息後には里流と  
いふ仲間の馬のたれせかたも叶をた去程ふ敬す  
てふせ先うらそ飛驒の判官景之宮とすふかく  
部太の由ありあて宮の由首を取をらんとすふかく  
宮の太力を振てををいひていけり我身ひの判官  
景之とみわらいつまじ事<sup>く</sup>君うらてつらせりあ又  
かろをん物ふふはあかうするをら<sup>く</sup>無する地おのれ  
と日本中一のえし物うらと云れはせら<sup>く</sup>いせおとて部太



十余人おち合たりかくもんらおとろる中一飛入てさんくま  
切せり寺法師に律性坊日印の弟子伊賀の津系坊の  
中子形ア俊秀等のありとまりて命をおしまた八百を  
比りまをら爰にせして十余人は皆此塔歩化にりまを  
に射ける程小覚もんといはれやをさせればあのかん  
てうといはついであし力をぬたてけらまたの引合せを  
押切てもらった切て富の由このじよりたるは後あやそ  
はさるるやとてやその由能小者もせと志に、より日印ハ  
ろをこりまて中へけりり入てかれば六人おち付死す伊賀

坊八人切せして五人に手をあせあすの方へ飛落おる  
此塔歩化に黒丸とせふりして富の由せをまゝま  
いらてあやせして寺法師律性坊日印といつゝの衆  
佐よりともいすの國のかそしける時諸寺諸山にたをを  
尋聞て愚ていのりをせせらけけるに家志や寺に  
と日印をりていのは師とせしけける日胤といいた  
十日よりて母云くそ大人若をとく志あしり七百に  
當る夜山室殿よりあつひ乃あををねとみ現をありて  
をえたと日印伊賀の國をこりりかて無齋佐にきり佐



及大に下流ありてありまの末たのりたる事  
いふれと後何れをせしむるに於て世業の  
のいけりやう程不強動をすへけれは日印を  
たてて死ありし事承てして後兵部佐将を  
坊の元け系去治承に高倉に宮の山崎中て討死仕  
てんとすか中たりれはあていふ事んの百小社  
とつたのにも神也昔語りし言のまじりや  
常すすし是志うあうは新助此故ありとてこの  
報恩者卷いすふたすしせをける。南部の大泉寺奈

人山堂うひ小斎り十々小光原木津川も無量の  
中、兵福寺の南大門の有名人は走り花たのりく  
あうのまはもは人今由平丁渡りせのいせうれは  
社出りれすしし法皇は皇も位つる方りて代き  
こころのまはもは人今由平丁渡りせのいせうれは  
あうのまはもは人今由平丁渡りせのいせうれは  
居るかに付しはせりいぬとすれはと大將軍は  
すはふりすと南部の大泉寺のあうれはと佐々木  
馬はこして文の由能くえあつるなりたりける



見せておせえをたりせんかこてに在り池のふかさはたの  
ぬの中へ入て軍にて難をかゝして日あたるやせをけり  
軍兵はれきうをよめてその地をいしていふものか入  
地をよむおせえかゝると云はりりかゝる家やりの  
今本は川をよむらせかゝる坂かゝるとうらせのいぬん  
おいけりよ洋衣たゝる死人さてもかきをよあゝたせせて  
おれてぬけちをふれと交の世を病し水笛をいこゝと  
あせりりいれせりいぬんさるせんとおその  
た心の病をよ抱たつたまゝせもあゝいけれよゆす

走りも出れす其の時命もよくあゝりける物哉  
と身かゝる是れあゝる山道は中祓禊の所なり我死にゆれ  
のあゝるまゝいぬんさるせりてゆられらるる地はに人よの  
いぬんら佐美を夜入て池の門をいぬんをいぬん  
京へゆりにりいぬんをいぬんをいぬんをいぬんをいぬん  
らるる正治元年の政名して伊賀守にありて那備をす  
ける此京信と六条守お宗原の孫左衛門佐宗光の子也  
さてまが始めて原三入るの事宗人まゝをいぬんけて  
軍兵都へのりいぬん有るぬのもめてられす新改入る



比ざとまのちたひりららとはりふわのた首を教政を  
とてわくけら世てまの由方そ行そ者六れ奈成はま  
早奈人し中家れいよとこ身教をたれすまお者  
七而奈人とも剛一其まといひふ人のまよりまより  
はるくして不知りまのまの者まよりまりたれ人々  
中いせいらと京中を尋られたれと曲其業た定成能  
先ひよあまの時中てまのまの系りてみ志りまのせいら人  
中れ定成能能をありて不せらるるまもまれ定成  
たれをたてあまふいさのまのまのまのまのまのまの  
いせ

女席をた出して不せられたり花の由首に  
かくり物もいして神をまつあし何そはめいあま花  
一定七由首とい走りにもりこ頭かたあつた中て由まも  
あしきましこれとお終らあし思言る人も女席のいほて  
今一度不中うんと思もれける志のあつたの余りに不  
けり中いようあつてけらるるれと終らあし一名のい  
いっせあしけんあしれまらしていとあしはらまはす  
たていらせらるるすふあ中たていらせ終らるるをい  
能能すたれたあし監用にて取りこれらめてたつくひ



出しまいし世にたひたすのせむひより水鳥のます  
らまのともを東の宮成館信いえのいし  
だみまいしけは時ふ取てたむるん先ゆく  
とくにありし

平家物語卷之八終



